続いていくお話（仮題）

蒼井　雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
続いていくお話（仮題）

【Ｎコード】
Ｎ６３１５Ｐ

【作者名】
蒼井　雪

【あらすじ】
同じ登場人物で、熟語をお題にして一話ずつ書いていきます。
いつも一緒にいるけど、友達以上恋人未満な悠と健、従兄妹同士の啓と碧。
二組の恋愛模様が書けたらいいなと精進中。
思いっきり不定期更新予定――
題名が思いつかないので、そのうち変えるかも……

曖昧

曖昧　高校二年　七月
ｓｉｄｅ　悠

「何言ってんだよ、それを言うなら風船ガムだろ？」
「違うわよ、あんず棒よ！　しかも凍らせた奴」
「バカだな、あのチープさがいいんじゃん。あ、サイコロキャラメルもあり」
「今、七月よ？　暑い時に冷たいもの食べなくてどーするわけ？」
今日も、いつもどおり周りから見るとくだらない、本人にとってはくだらなくない言い争いを展開していた。

「ねぇ、あんた達って付き合ってるんでしょ？」
その言葉に、言い合いをしていた私達はぴたりと動きを止める。
「誰が、誰と」
「悠と健が」
私の問いに、横にいて頬杖を付きながら私たちを見ていた碧がさも当然のように言い放つ。
同じクラスの黒崎　碧。
綺麗なストレートの長い髪を、鬱陶しそうに耳に掛ける。
碧の言葉に思わず瞬きを繰り返してから、目の前の健に目線を戻した。
向こうも、私を見ている。

「付き合ってたっけ、うちら」
「さぁ、初耳だな」
お互い、きょとんとしながら首を傾げていたら、その仕草がつぼにはまったのか、碧の横で本を読んでいた啓が噴出した。
「それだけ息があってれば、そう思われると思いますよ。少なくとも、私の学年はそう認識してますけど？」
一つ年上の黒崎　啓は、碧の従兄。
茶色がかったサラサラの髪に、細身のめがね。
仲がいいはずなのに、敬語が普通。
碧に対してもそうだから、思うものは何もないのだろう。
啓の家に碧が居候している事もあって、放課後は大体一緒に帰る。
高校三年の啓だけど、がつがつと勉強をするでもなく、のんびりと本を読んでいる事が多い。
大学も、文系に進むといっていた……気がする。

「なんで三年で、そんな認識があるわけ？　別にうちら有名でもないのに」
「だな」
私の言葉に頷く目の前の男は、同じクラスの藪坂　健。
……どのくらい、同じクラスやってきたかしら。
小中高と同じ学校に通い続け、小４．５と中２以外全て同じクラスの腐れ縁。
これだけ一緒にいれば、息も合うでしょうよ。
啓は読んでいた本に長い指を挟むと、それを閉じた。
私たちを見る姿は、優しく微笑んでいる。
喜怒哀楽の怒と哀をどっかに忘れてきた感じ。

「有名ですよ、悠も健も。外見もいいですし、それ以上にもう忘れましたか？　四月の全校集会のこと」

外見もいい、の言葉に向上した気持ちがその後の言葉にがっくりと肩を落とす。

「忘れてないわよ、うるさいなぁ……。でも、あれは健に責任があるんだからね？」

途中から目の前の健に向けて言うと、奴は眉を顰めて右手を振った。

「お前が原因だろ。人の所為にしてんじゃねぇよ」

高二の四月、全校集会。

その時も、言い争ってた。

既に、何で言い争ってたのか原因も思い出せないくらい、とてもくだらない事で。

でもいつの間にかヒートアップして、教師に怒られるはめになったのだ。

全校生徒の前で。

ま、とりあえず。

「私、新藤　悠。誓ってこいつとは付き合ってはおりません」

宣誓のように右手を胸の前にあげて口にすると、

「俺、藪坂　健は、誓ってこいつと付き合うことはありません」

――

ピキッと、額に青筋が浮かぶ。

「拒否すんのは好きだけど、拒否られんのはムカツクのよ！　撤回

しなさいよ、今のっ！　大体人の言葉パクッときながら、少しだけ変えるとかあんた何様？！」
健の襟首を掴んで力を込めると、奴は楽しそうに目を細める。
「はっはー、何お前、俺と付き合いたいの？　そーならそーと、素直に言わなきゃ。分かんないよ悠ちゃん」
「うっさいわ！　ちゃんとかいうな、そんなもの小学生の時に卒業しただろ。たけちゃんめ！」
「お前の方がうるせぇよ！　たけちゃん言うな、せめて健ちゃんって言え！！」

そんなわたし達を、呆れた目で見ている二人。碧と啓。

「どっちも大差ないわよねぇ、啓」
「そうですね。さて、そろそろ帰りましょうか」

啓はにこやかな笑顔でそう宣言すると、手に持っていた本を鞄にしまって立ち上がった。
碧が続くように、立ち上がる。
「ほら、二人ともいい加減にしないと。帰ろう？」
碧の言葉に、私達はじっとにらみ合ってふぃっと顔をそむけた。
「あぁ、そうね。仕方ないからここら辺で止めてあげるわ、感謝なさいっ」
「そりゃこっちの台詞。俺は優しいから、花持たせてやろうってんだ」

「あぁ、この二人面倒」
「碧、先に行きましょうか」
尚、言い募ろうとしていた私達は、啓の言葉に慌てて鞄を手に持った。

「「準備万端です！　啓おにーさま！」」
二人同時に言うと、啓はふふと軽く笑ってドアへと歩き出す。
「私には、従妹が一人いるだけだと思ってましたが？」
「啓兄さん、早く行こう」
「……貴女に兄さんと言われたくはないですね」
碧の呼びかけに、小さく呟いたのを私は聞き逃さなかった。
碧は思いっきり聞いていないけど。

四人ぞろぞろと歩きながら、昇降口を経て校庭に出る。
自転車を取りに健と啓が駐輪場へと歩いていくのを見ていた私に、
碧がため息混じりに呟いた。
「ねぇ、悠。あまり意地張ってると、タイセツナモノ、無くしちゃうよ？」
あまりにも唐突な言葉で、何も言えず碧を見つめた。
「健と悠って、本当に友達でいいの？　どちらかに恋人が出来たら、一緒にいられなくなるんだよ？」
「え……、と。何、言って？」
いつもにない真剣な声だったから、笑い飛ばす事ができなかった。
「友達以上恋人未満って、言葉はいいけど一番曖昧なんだからね。後になって悔やんでも、私知らないから」
向こうから、私を呼ぶ健の声が聞こえる。
「おーい、お前らコンビニでなんか食っていかね？」

「私、肉まん」
「この時期にあるか！」
碧の言葉に突っ込む健に、顔を向ける。

「悠、お前は？」
「……あんず棒」

沈黙が降りる。

「……面倒な奴らだな。啓、コンビニじゃなくてその先の駄菓子屋行くか。そこなら、うるせぇ女達のご希望品があるから」
健はサドルを跨ぐと、行ってくる、と私達に言い残して自転車をこいで行ってしまった。

「なんだかんだいって、優しい子ですねぇ。健は」
啓はその後を追いかけるように、ゆっくりと自転車をこいでいく。

その姿を見送りながら、私と碧も歩き出した。

なんでもない話をしながら、顔に笑みを浮かべながら。
碧に言われたことが、ずっと頭の中で繰り返してる。

――友達以上恋人未満って、言葉はいいけど一番曖昧なんだからね。
後になって悔やんでも、私知らないから

ずっと一緒にいた、健。
気も使わずにいられる、唯一の男友達。

恋愛って、何？
付き合うって、何？
今のままじゃ、いけないの？
考えれば考えるほど、深みに嵌っていく。
だって……
その曖昧さが、私にとって一番心地よい関係だから。
ねぇ、健はさ……違うの？
ずっとこのままがいいって、そんな事思ってる私は……いつか今を後悔する時が来るのだろうか

＜曖昧　内容がしっかりと捉えにくく、はっきりしないこと＞

意義

意義　　高校二年　十月
ｓｉｄｅ　悠

「お前といる意義って、なんなんだろう」
「――は？」

いつもの放課後。
今日は久しぶりに部活に顔を出すといっていた啓の勇姿を、いつもの三人組で見に来ていた。
啓は弓道部。
やった事のない私には一つもわからないけど、さっきから的の真ん中をずばずば射抜いている。
それを弓道場の一番端に固まって見ていた私達。
突然口を開いた健が、不思議そうに呟いた。

「私といる、意義？」

碧もいるのに、健の視線は私だけに向けられていて。
言われている意味がよく分からず、私は首を傾げた。

「小中高、何の因果か三回以外は同じクラス。それをおかしいとも思えなくなってきた、今日この頃な俺」
「あぁ、悠。さっき啓が読んでた国語辞典を盗み見してたのよ、健。なんか、言葉面が気に入ったんだって」
淡々と言う健を尻目に、碧は私の疑問をいち早く解決してくれた。
持つべきものは、友。

さすが、碧。

私はまだ何か言っている健に向けて、呆れた顔を向ける。
「それなら、私があんたといる意義ってなんなわけ？」
「格好いい俺様といるのが、ステイタスだから」
「アホか」
「アホとはなんだ。そう言った方が、もっとアホだ」
「はいはい」
またくだらない言い争いに発展しそうで、とりあえず止めた。

啓は温厚で優しいけれど、部活中だけ人が変わる。
今も、無言の黙れ視線がびしばしと向けられてるのが、分からないのかこのアホ健！

「ていうか、なんで私にだけ向けるわけ？　その疑問。それじゃ、碧や啓が一緒にいる意義は？」
「従兄妹同士だから」
……そうじゃなくて、私達といる意義を聞いてるんだけど。
言っても無駄だろうから、ため息だけでそれをおさめる。

「んで、意義の意味は？」
「え？」
「だから、意義の意味」
言葉面だけで言ってるってことは、詳しい意味知らないんじゃないの？
にやにやしながら健を見ると、案の定、視線をくるくると動かして懸命に思い出そうとしてる。
ふっ、ドアホめ。

「必然、でしょう」
「え？」

今まで弓を射っていたはずの啓が、いつの間にか碧の横に立っていた。
「意義の意味じゃなく、二人がいる意義。私は必然だと思いますよ」
「必然？」
て、どういう意味？
健を見ると、同じく意味が分からず私を見たところだったらしく、目が合って首を傾げる。
啓はハンドタオルで汗を拭きながら、眼鏡の位置を直した。

「意義の意味は、“行為・表現・物事の、それが行われ、また存在するにふさわしい価値。その言葉によって表される内容”。必然の意味は“必ずそうでなければならず、それ以外ありえないこと”」

にこりと笑う啓に、二人して恐れおののく。

「暗記してる所が、人間じゃねぇ」
「すでにもう端から忘れてるんだけど、私」

呆気にとられて笑っていたら、碧がため息をついて立ち上がった。
「啓、もう部活終わり？」
高い場所にある啓の顔を見上げる碧は、視界に夕日が入ったのか眩しそうに目を細めていて。
それを微笑みながら見つめる啓の姿に、こそこそと健と言葉を交わす。

「この二人は従兄妹だからじゃないな、俺間違ってた」
「そーよね。二人だから……ていうか、さっき啓が言ってた“必然”はこの二人の意義よね」

思わず顔がにやけてしまう。
華奢な体躯、ストレートな真っ黒い髪の毛、白い肌に大きい目。
和風な美少女、碧。
その横に立つ、すらりとした細身の身体に、高い身長。
サラサラの茶色がかった髪、眼鏡の奥の優しく微笑む目。
格好いい、大人な雰囲気の啓。

二人が並ぶと、誰も入る隙がないほど、完成された絵に見える。

ついつい二人の姿に見惚れていたら、碧がこちらに視線を向けた。
「何？」
凛とした声でそう言われてしまうと、返す言葉が出てこない。

だって。

碧の後ろからこっちを笑顔で睨む視線が、とっても怖いので。

「頭のいい従兄を持って、羨ましいと思って」
「だよな。俺、国語辞典、自分の読書の本にしたことねぇもん」
それは、私も。

私達の言葉に、碧の後ろに立つ従兄さまから無言の圧力が消えました。
……よかった。

そんな攻防があったとは一つも気付かない碧は“あぁ”と納得して、手のひらを目の前に出した。

「啓のベッドサイドテーブルには、沢山置いてあるわよ？　大辞林でしょ？　それに広辞苑・古語辞典・和英辞典・和仏辞典・和独じて……」

「もういいです、すみません。大辞林てなんですかって感じなので」

碧の言葉を、両手を前に突き出すことで遮る。

すでに、脳みそが蕩けそうだわ。

「帰る用意をしてきますので、外で待っていてくれますか？」

啓はそう言うと、碧の頭を軽く撫でて弓道場の出口へと歩いていった。

その途中途中、後輩から声を掛けられながら。

「啓はモテモテねぇ。どうして彼女、作らないのかしら」

「……！」

後輩の女の子に話しかけられている啓を見て、碧がふぅっとため息をついた。

私と健は、内心びびってたけど顔にはそれを出さず何とか口を開く。

「でも啓に彼女が出来たら寂しくなるよね、とくに碧はいつも一緒なんだから」

引き攣った笑いを浮かべると、碧は両腕を前で組んで“別に”と笑う。

「彼女ができれば、私と一緒にいる時間が減るでしょ？　過保護すぎるのよ、啓兄は」

「うあああ」

周りに聞こえないように思わず声を上げた健を、碧は怪訝そうな目

で見つめていて。
私もばくばく心臓を鳴らしながら、碧の腕を掴んだ。

「さ、外に出よ？　部外者がいつまでもここにいたら、お邪魔になるから」
「あぁ、そうね。いこっか」
私の言葉にあっさりと頷くと、鞄を手にとって碧が歩き出す。
一緒に外に出ると、碧に啓の自転車の鍵を貰って健と駐輪場へと急いだ。

「こっえぇな、今の会話。啓に聞かれてたら、俺達の寿命が縮む」
「ホント。碧ってばなんで自分の恋愛に鈍いのかしら。あれだけ啓があからさまに碧を大切にしてるのに」
二人で、うんうんと頷きながら早足で歩く。

啓は碧の従兄。
でも、それだけじゃない。
啓はずっと碧に片想い。
なんでそれを知っているかというと、啓と私達の初対面にまで記憶は遡る。

一年の春。
私と仲良くなった碧は、当たり前のように私と一緒にいる健とも仲良くなって。
何を勘違いしたのか、碧を狙ってるのかと啓が虫除けにきたのだ。
“私は碧の従兄で、黒崎　啓と申します。あなたは？”
怖かった。

微笑んでいるのに、冷たい視線。
健に向かって言われているのに、なぜか私まで固まった。
“はい？”
健も呆然としているのか固まったまま、聞き返すのがやっとのようだ。
“……君、少しよろしいですか？”
丁寧な言葉で健に聞いているけれど、確実に強制で。
一瞬身体を強張らせた健は、私に心配するなと言い置いてその後ろを付いていった。

あの時は本当に焦った。
呼び出しだ！　呼び出しだぁぁっ！　と。
職員室に行こうか、碧を呼びに行こうかあわあわしていたら、そんなに時間もかからず二人が戻ってきた。
穏やかな雰囲気で笑いながら。

健は固まったままの私の肩を掴むと、力任せに前後に振る。
“なっ、何すんの！？”
無理やり動かされたから、頭がぐわんぐわんして気持ち悪い。
健は肩から手を離すと、にやりと笑った。
“動いただろ、身体”
“そっそれはそうだけど、ていうか大丈夫なの！？”
思わず啓を盗み見しながら叫ぶと、申し訳なさそうに彼が謝った。
“怖がらせてしまったようで、申し訳ない。私の勘違いでした。私は黒崎　啓。君達より一つ上の二年に所属しています。何かあったら、頼ってください。今日のお詫びに、力を貸しますから”

そうやって笑う啓から恐怖は微塵も感じず、あとから健に聞いた真相によって、私の中から不信感は全て拭われた。
“恋愛に鈍い従妹を、守ってるんだって。自分が好きだから、自己満足で”
可愛いと、思ってしまった。
そしてたった少しの間で、その理由を聞き出せた健も凄いと思った。

「おい悠、大丈夫か？　黙りこくって」
「うぇっ」
耳元近くで聞こえた声に、思考が現実に引き上げられた。
慌てて後ずさると、後ろにあった自転車が数台倒れていく。
「あ……」
既に駐輪場についていた事に、今気付いた。
「何やってんだよ、悠ぁ」
健はため息をつくと、既に引き始めようとしていた自転車のスタンドを立てて、私の後ろへと歩いていく。
倒れた自転車を戻し始めた健に、慌てて声を掛けながら私も自転車を引き起こす。

誰とでも仲良くなれる、健。
きっと、隣にいるのは私じゃなくても大丈夫な健。

さっき、啓の言葉に対して何も言ってはくれなかったけど。

本当にそうだったら、いいのに。

私達が一緒にいる意義が“必然”だと、健は納得してくれたのかな。

＜意義　行為・表現・物事の、それが行われ、また存在するにふさわしい価値。その言葉によって表される内容＞

烏鷺

烏鷺　高校二年　十二月
ｓｉｄｅ　碧

私、黒崎　碧。十七歳。
名前に二つも色の語が入る。三つしかないのに。
黒なの？　碧なの？
小さい頃は、そんなくだらない事を考えていた。

“碧は、黒でも碧でもないですよ”

ある日言われた、従兄からの言葉。
すとん、と何かが落ちた。

“君は、君自身の色があるのであって、黒や碧と決められるものではありません”
優しくそう言ってくれたのは、一つ年上の従兄。
黒崎　啓。
幼い頃からひたすら敬語で話すのは、啓の自己防御。
私もそうだけど、啓も見えないもので雁字搦めにされている。
その原因の一端に自分があることを自覚している私は、少しでも啓に自由にして欲しいのに。

「碧、帰りましょう」

「……うん」

突き刺さる、視線。
心が、痛い。
見えない場所に傷を付けてくる、他人の視線。

いつも一緒にいる悠や健がいれば、あまり気にならないのに。
今日に限って、補習で居残り。
図書室で待っていると言った私に、先に帰って、と二人は笑った。
気を遣ってくれているのは分かるけど、今の私にとっては残酷な宣言だった。

「碧、どうかしましたか？」
校庭を通って、門から外へ出る。
途端少なくなった視線に、知らず安堵の息を吐いていたらしい。
心配な声音で、啓が私の腕を掴む。
引かれる形で足を止めた私に、啓は伺うようなそんな視線を向けていた。

――ヤメテ
そんな目で、私を見ないで。
貴方の将来を潰したのに、貴方の自由を奪ったのに。
私に向けられるべき視線は、怒りのはず……

けれど口に出せない思いを、私は飲み込む。

「なんでもないわ、啓。帰りましょ」
口端を上げて、ゆっくりと微笑む。

絶対に見せない、絶対に気付かせない。
私の心、本当の気持ち。

「碧？」

心配そうな啓の顔を目を細めて見上げる。
「なぁに？　私の顔に何かついてる？」
作り上げた笑みを貼り付けると、啓は納得したのかどうか、そうと呟いて前を向いた。

物静かで大人しくて、本が好きな啓。
小さな頃から、彼の隣にいればそれだけでよかった。
私は、貴方を苦しめるために一緒にいたいと願ったわけではないのに――

私を見つめる貴方の気持ちは、従妹の私を守りたいと……純粋に真っ白で。
その眩しさに、目を逸らす。

まっくろな、私の心。

貴方は、黒でも碧でもないって言ってくれたのに。
何も映さない、全てを隠しつくす暗闇に染まる私の心。

だから、絶対に気付かせない。
絶対に、見せてはいけない。

暗闇で覆い隠して、欠片さえも漏らさない。

貴方への、恋心を――

＜烏鷺・うろ　―からすとさぎ。黒と白。＞

悦服

悦服　十二月
Ｓｉｄｅ　啓

黒崎　啓、十八歳。
私の頭も腹の中も、黒に染まらない場所はない。
たった一つ、碧という存在以外は。

学校を出て、自宅に向かう。
そこは、二駅先にある少し山に近い場所。
駅から歩いて十分ほど。
そこに、純和風の大きな邸宅がある。
私と碧を……、さまざまな人間を縛り付ける象徴とも言える建物。

「お帰りなさいませ、啓さま、碧さま」
「ただいま」
「ただいまです、紗江さん」
挨拶をする私の後ろから、碧が嬉しそうな声を上げて紗江の傍による。
「私は部屋に戻るので」
その二人がから離れ自身の部屋へと歩き出す私に、紗江が声を掛ける。
「後ほどお茶をお持ちいたします」
「はい、お願いします」

顔だけ後ろに向けてその声に応えると、紗江が小さく頭を下げた。

自身の部屋にたどり着くまでに、長い廊下を歩いていかなければならない。
幼い頃から当たり前のように行っている行動ではあるが、ばかばかしくてため息が出る。
中庭を横目に途中右に折れ、その奥、廊下の切れるそこが自分の部屋。
碧の部屋は右ではなく廊下を左に折れた、その奥。
いるのかいないのかまったく分からない家族の部屋は、玄関を入って右へと廊下を歩く私たちとは違い、左へと折れていくから端同士。
顔を合わせること自体、月に一度あるかないか。
それでも私を子供と、家族を“家族”として扱おうとする厚顔無恥な考えが、幼い頃は理解できなかった。

今なら、分かる。

いや、今、じゃない。

碧が、この家に、引き取られる事になったあの日。

あの言葉を、聞いてから。

――これで、“コマ”が増えた

そう、私は……私達は、大人にとって“コマ”の一つでしかないと

いう事に。

ドアを開けて部屋に入ると、首元まで止めていたホックを外す。
濃紺の学ランはボタンではなく襟のホックを外せば下までチャックで留まっていて、着脱がとても楽で気に入っている。
一歩間違えば、ジャンパーのような感じもするが。

脱いだ制服をクローゼットにしまうと、適当な服を身に着けてソファに腰を降ろした。
純和風なこの家は、いくつか洋室もあって自分の部屋も碧の部屋もそうなっている。
碧は部屋に戻ったのだろうかと思いながら、ソファに背をもたせ掛けた。

黒崎家
総合商社を軸に、いろいろな業種に手を出している老舗企業。
その始まりは江戸時代ともその前からとも言われてはいるが、その家系に見合うくらい時代錯誤も甚だしい家庭環境。
恋愛結婚をした人間がいるのだろうかと疑問に思うほど、冷め切った血の繋がり。
幼い頃はそれでも家族の温かみを望んだ自分もいたが、無駄だとすぐに悟った。
幼なかった自分がどこまで理解し納得してそう感じたか甚だ疑問だが、その頃から誰にも気を許さないという意思表示を“敬語”という自己防御で示してきた。

今ではそれが当たり前のようになっているが。

その自分が、初めて“人”として認識したのが碧だった。

碧は、父親の妹の娘。
自分にとって、従妹に当たる。
が、私は碧の母親を……両親を見たことがない。
なぜなら。
碧と初めて会った日、彼女の両親はこの家から絶縁されたから。
望んだ絶縁だったが、その条件が彼女をここに置いていく事だった。

“コマ”として。

まだ、碧が四歳になるかならないかあたりだった。
けれど気付いている部分はあるらしく、昼は普通でも夜中によく泣いていた。
私はそんな彼女を慰めながら、ある、一つのことを決意した。

あれは、中学に上がった後。
長男として会社を継ぐことにずっと難色を示していた私が、継ぐための条件として父親に提示した事。

「碧を自由にしてください」

本当に、会社を継ぎたくないと思っていたわけじゃない。

継ぎたくなくても、どうせ継がなければならないのだ。
反抗したとしても、いかなる手を使ってでも従わせようとするだろう。
ならば。
一番の望みを叶えるために。
それだけの為に、継ぎたくないという嘘の態度をとり続けた。
碧を、この血のつながりの中でたった一人、私が大切な人と認める彼女の自由を。

父親は、騙されているとも知らず喜色を浮かべ、すぐに承諾した。
“役に立った”と、呟いて。

最低な、親、だった。

「啓、いい？」
ドアの向こうから響く女性にしては低めの声に、はっと意識が現実に引っ張り上げられた。
足音をあまりさせず、大股でドアに近づきそれを開けた。
そこには、思ったとおりの人がいて、思わず目が細まる。
「碧、あぁ……お茶を持ってきてくれたんですね」
碧が持つお盆にのせられた湯飲みに視線を落とし、その手から取り上げる。
「重かったでしょう、どうぞ？」

お盆を持っていないほうの手でドアを大きく開いて、碧に入るよう勧める。
「え？　ううん、啓の分を置いたら部屋に行くから……」
そう言われて見てみれば、彼女はまだ制服を着たままだ。
手には鞄まで持っている。
「せっかくお茶菓子もあるし、ここで飲んでいきなさい」

ダメ押しのようににこりと笑うと、碧は視線を彷徨わせた後小さく頷いて部屋の中に入った。
それを見届けて、ドアを閉める。
もちろん、鍵も。

カチリという軽いけれど金属的な音を耳にして、碧が弾かれたように私の顔を振り仰ぐ。
それに苦笑しながら、空いている手でぽんっと碧の頭を軽く叩く。
「警戒しないでください、ただの癖ですから」
「それもどうかと思うけど……」
そう言いながらも、彼女は警戒を解いて窓際にあるソファセットに向かって歩いていく。

信頼と申し訳なさ。

碧が私に向ける感情のほぼ全てが、この二つで成り立っていると思ったのはいつだろうか。

幼い頃は、この大切な人を守っていこうと思った。
けれど、成長するにつれてそれが恋愛感情だと気付く。
狂おしいほどのこの気持ちは、すでにそんな可愛らしい言葉では言い表せないとは思うが。

彼女が、欲しい。
傍に、いて欲しい。
ずっと、このまま、一生を。
私が、この世に別れを告げるその瞬間まで。

彼女となら、この最低な家の中でも、生きていけるかもしれないと一縷の望みを寄せている。

碧の座るソファの前、ローテーブルにお盆を置いて自分の湯飲みを手に取る。
「洋室に湯のみって、面白い組み合わせよね」
そう言いながら、碧は上生菓子に手を伸ばしていた。
「そうですね。でも私はお茶の方が好きですから、紗江さんに感謝しますよ」
他の手伝いの人だと、珈琲を淹れられる確率が高い。
面倒だから、そのまま頂くが。

碧は私の言葉に笑みを浮かべて、竹楊枝で切り取った菓子を口に含んで頷いた。
「私も和菓子の方が好きだわ。おいしい」
普段、感情を露わにしない彼女が見せる、ふとしたその表情。
どれだけ、それを自分だけのものにしたいと願うか。

「碧、私にも頂けますか？」

手を伸ばしてお盆近くに浮かせると、碧は懐紙ごとのせてくれる。
「ありがとうございます」
そう答えながら。

「おいしいよ、早く食べてみて？」
微笑む、彼女の顔だけを見つめる。
自由をあげようと望むのに、この家を継ぐ私の傍にいて欲しいと望む。
矛盾だと、分かっている。
けれど。
家とか、立場とか関係なく、自由になった君に私を選んで欲しいから。

「啓、おいしいものを食べるのってやっぱり幸せね」
菓子を食べ終えた碧は、本当に幸せそうにお茶を飲んでいて。
「そうですね」
そう、答えながら。

その顔に、幼い碧の泣き顔が重なる。
――　一人は、やだ

そう泣いた、碧。

――　ずっと、一緒にいますよ

そう答えた、私。

花が綻ぶ様に、笑顔を見せてくれた碧に惹きつけられた。

待っているから。
自分の感情に鈍くなるのは、得意だから。

いつか。
碧、君の心を私にくれないだろうか。

私は、君に言われた言葉だけを光に、生きているんだ。
父親や周りから押さえつけられるのは我慢ならないが、君の言葉なら喜んで従う。

君の望みのままに、僕の望みの為に。

＜悦復・えっぷく　喜んで心から従う事＞

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6315p/

続いていくお話（仮題）

2011年1月4日02時42分発行